
どうでもいいです。

松嶋ネコチロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どうでもいいです。

【Nコード】

N3484P

【作者名】

松嶋ネコチロウ

【あらすじ】

些細なことで上司を殴り、会社を飛び出してしまった男のささやかな一日。

「ほんとっ、お前って常識ねーのな。やっぱあれだな、カエルの子はカエルっつーか。カーチャンに似てんだろっな、お前って」

ええ、俺が悪いんです。出先で重要書類を間違ってケンタのゴミ箱に突っ込んできたなんて、いまだ小学生でも吐きません、そんな言い訳。

でも一応探したんだよ、書類。相手先から受け取った設計図書だったか契約書だったか。俺もその重要性は分かってるつもりだったんだけど、なにしろ昨日は残業で朝方まで起きっぱなしだったし、そんな身体でケンタの油っこいチキンをもしかややってたら気分が悪くなったんだ。思考も正常さを失ってたわけ。それで、トレーのクリスマス広告と一緒にポイ。帰社するため、吐き気を抑えながらプラプラ歩いて四十分、ようやく気づいた。

あれ、俺、あんとき捨てちまったかもしんねえ。

急いで戻ったときにはもう遅い。店員が、ゴミならもう回収しましたよ、と言う。もちろん俺は、じゃあそのゴミ袋の中身改めさせてくれて詰め寄った。そうしたら店員は申し訳なさそうに外に向かって人差し指を突き立てるんだ。店員の指し示す方を見て、俺はびっくりし過ぎて胃の中のチキンを噴射してしまうところだった。

ゴミ収集車がのろのろとケンタの前を発車しているところだったのだ。ちょ、ちょ、ちょ、と俺の舌は回りきらなくて、それでも足はつんのめりながらも前へ出た。

「まあてい！」

時代劇の主演さながらに台詞を発した。そこでゴミ収集車が止まってくればいいのだけど、俺の声が届くわけもなく、仕方なく俺は全身に脂汗を垂らしながらもそれを追った。

そして、俺はしょんぼりしながら会社に戻ることになる。満面の笑みで俺を迎える次長に事の成り行きを説明すると、一変、次長は

さつと表情を無くしてこう言ったのだ。

「お前、ちよつと来い」

やべえ、ボコボコにされる。

てめえ無くしたんなら正直に言えよワケわかんねえ嘔吐いてんじやねえお前の顔面をお月さまにしてやるうか、つて。顔面をクレーターだらけにされると思ったんだ。

でも、現実には甘くはなかった。現実には思ったより手痛い傷を与えてくれるのだ。

次長は俺を無人の会議室に連れ込み、彼はパイプ椅子にどっしりと腕組みして座り込んで、そして俺の人間性やその他欠点をチクチクと攻撃してきたのだ。

これならば、殴られたり踏みつけられたりした方がマシと言うものだった。

まあしかし、それだけならぎりぎりで耐えられようと言うものだ。俺の母親をタネに嫌味を言われるまでは。

「そもそもお前よくこの会社に入れたな。大学は早稲田だっけ？

お前のカーチャン、相当身体汚したんだろうな。ナハハ、お疲れさま」

ナハハ、と笑いつつも、次長は蔑んだような目色で俺を攻撃した。俺も正直、母のことは尊敬していない。むしろ嫌いだ。

若い頃は「風俗つて、チョー稼げるじゃん」と言つて家族を傷つけるし、父には離婚を言い渡されるし、離婚しようというときには息子である俺の親権を訴え、そして言うくため、俺はあえなく母に連行されるように家を去った。今でも母は懲りずにキャバクラで働いている。いい年して化粧はケバケバだ。

そんな母とは180度違う人生を送りたかったから、俺は必死に勉強して大学へ行った節がある。母に似て頭の悪い俺だったが、それはもう死にもの狂いで勉強したのだ。

「勉強なんて社会で生きていく上ではなんの役にも立たないのよ」という母のどち狂った教育理論を無視して。

早稲田に合格したとき、俺は勝った、と確信した。何と戦っているのか分らないが、それでもあの瞬間、勝利を味わったんだ。そして俺は、この大手の企業に就職した。まさに母とは違うエリートコース。まさに、ざまあみろ、という感じです。

この前母が、「あんたの上司、うちの店に連れてきなよ。最近指名がとれなくてさあ」と臆面もなく言った。生活費に関わる問題なので、仕方なく次長ら一行をドラクエの仲間のように背後に携えて母の勤めるキャバクラへ案内したのだ。

母は、次長らに俺の幼少時代の恥部を語り、ネタにした。俺は赤面して縮こまりながら、皺を隠しきれない母の頬を流し見た。俺の若気の至り話より、むしろ母の存在の方が恥ずかしかった。

「ほんと恥ずかしい息子ですけど、これからもよろしくお願いしますね」

あんたのが恥ずかしいよ、クソババア。

そう、俺は見下していたはずなんだ、母という人間を。

そして今、次長は嘲笑を交えながら、俺の母親のことを小馬鹿にしている。次長の突っ込みがあまりに的を射ているもので、俺は共感しつつ「ごもっとも、ごもっともでございます」と申し訳なさそうに頷いた。共感してやると次長はだんだんと調子づいてくる。毒舌ぶりにも脂が乗ってきた。

俺はへらつきながら身を屈め、革靴を片方脱いだ。

「本質的にはクズなんだよ。お前ら母子は」

「えへへ、えへへ」

俺は革靴の裏を思い切り、次長の幸薄い頭上に振り降ろした。パカーン。間抜けな音が鳴って、次長が驚嘆し目を白黒させた。

「俺の母ちゃんが何だって!? もういつぺん言ってみろ、殺すぞこらあ!」

次長の胸ぐらを掴んで頭をパコパコしばくと、次長は口をあんと開けた。その表情がカエルみたいで妙に笑えて、次第に俺はパコパコしながら高笑いをしていた。そのうち同僚や先輩が入ってきた

たので俺はパコパコを止め、それでも笑いが止まらず、彼らを振り払いながら会社を飛び出した。

ゲラゲラ笑いながら全速力で駆けていくリーマンを見て、通行人はどう思っただろう。きっと頭のハジけた奴だと思っただに違いない。

気づくと、俺は見知らぬ駅に座り込んで旅行のパンフレットを眺めていた。駅構内の旅行代理店の店頭のパンフだった。手にしていたのは世界一周旅行と銘打たれたパンフのある一ページ。アラブだった。俺はひそかに石油王にでも憧れていたのだろうか、と首を傾げる。

旅行代理店のガラスには俺の顔が映っていて、ぞっとするほどの能面をしていた。完全に素面だ。

立ち上がり、周りを見渡す。やはり俺の知らない駅だ。ただ人通りは多く、どうやら俺は辺境じみた駅に來たわけではないと知る。

駅は高架橋によってデパートなどと地続きになっており、橋の上では路上演奏やダンスパフォーマンス、ティッシュ配りや売り込みなどが盛んに行われていた。

秋にも関わらず人の熱気でむせ返るようだったので、俺は背広を脱いで手に持った。

携帯を見ると、会社や同僚からの着信が十数件入っていた。嫌気がさす。現代の日本人は携帯電話に支配されている気がする。会社の上司が休日出勤を命じると決めれば、たとえホテルで女とセックスしていても呼び出せる。恋人など作ってしまえば携帯によって二十四時間彼女に監視されてしまうという条件付き。そんな役目まで負わされる携帯電話は可哀想だ。

だから、今日だけはおやすみ。俺は電源を切り、ポケットに仕舞いこんだ。ついでに全身のポケットというポケットを探って持ち物を確認してみる。

俺が持っていたのは財布と携帯ぐらいだった。バッグは会社に置いてきてしまったようだ。

さて、これからどうしようかしら。

まずはカラオケに入ってストレスを発散しようと思った。六時間ヒトカラしてたくたになってやるう。けれど俺はあまり歌を知らず、五十分で曲が尽きてしまった。その後、一人ボウリング、一人ネットカフェ、一人焼肉としゃれ込んでみたけれど、どれも楽しくなかった。コンビニでジャンプを立ち読みすれば先週号を読んでいなかったことに気づいて、あまりのつまらなさに俺はその場で地団太を踏んだ。ちら見してくる周りの客を睨み回しながら、俺は駅の高架橋へと戻った。

ホームレスが一人、新聞紙に丸まって眠っていた。ホームレスの前には週間雑誌や漫画雑誌が並べて置かれており、空の缶詰が二、三個置かれていた。これで路上販売をやっているつもりなのだろうか。

はたと、俺は目を見張る。先週号のジャンプだ。手にとって見ると、やはり間違いない。慌ててホームレスのおっさんを叩き起こす。

「あぁんだ？」

「これ売ってくれ」

「あ？ ああ」

ホームレスのおっさんは大儀そうに上半身を起こし、胡座をかいて首のあたりをボリボリとさする。彼は無言で指を三本立てた。

「三百円か？」

「ばーろー。三十万だ」

フリーザが自らの戦闘力を明かしたときのような衝撃が走った。けれどおっさんはフリーザではないので、このまま蹴りを入れてジャンプを奪い去ろうかと画策する。

するとおっさんは顔面土砂崩れのように破顔して笑い、どんと俺の肩を押した。

「うそうそ。三千円で売ってやるよ」

俺はほっと胸を撫でおろした。何だか騙されてる気がしないでもないけど、俺にとって読み逃したジャンプは充分三千円の価値があ

る。おっさんにお礼を言い、財布を取り出した。財布の中身を見て、愕然とした。千円と少ししかない。キャッシュカードも、会社のデスクのカードケースに入れたままだ。

おっさんにそれを告げると、おっさんは激怒して俺の胸ぐらを掴んだ。

「冷やかしか、てめえ」

「すんません。もう買うのやめます」

「駄目だ、さっきてめえは買うと言った」

「でも、金ないっす」

おっさんは黒くすすけた顔で俺を睨み据えた。所々抜けた歯並びを剥き出しにさせる。野獣のような臭い鼻孔をつく。

「とりあえず千円よこせ」

「は、はい」

おっさんは俺から千円をふんどくり、日の光に透かして野口の絵柄を眺める。それから俺をじろりと見た。

「残りはバイトで払ってもらう」

「バイトすか」

おっさんはそう言うと、風呂敷に雑誌類を並べて包み、腰を上げた。

「来い、もっと人の多いところに行く」

すたすたと軽い足取りで歩いていくので、俺は慌ててジャンプを脇に挟み、おっさんを追いかけた。

おっさんは先程の千円札を券売機に入れ、切符を買ってさっさと改札口へ行ってしまった。俺も残り少ない小銭をはたいて切符を購入する。

おっさんは電車の座席に腰掛けると、渋谷に着いたら起こせ、とだけ言っただけで寝始めた。電車のドア上部に貼られた路線図を見ると、このまま乗れば渋谷に着くらしいことは分かった。そのまま逃げることも出来たが、今度おっさんに街で出くわしたらぶん殴られる気がしたので、大人しくおっさんと対面する座席に座って渋

谷に着くのを待った。

渋谷の一駅前でおっさんを起こそうと近寄ると、おっさんは俺の近寄る気配だけで跳ね起きた。野生動物並の反応レベルだった。

おっさんは渋谷の駅前で風呂敷を広げ、さっきと同じような古雑誌露店を開く。俺が手ぶらで突っ立っていると、おっさんは一言、集客しろ、と命じてきた。戸惑い、まごついていると、おっさんが俺のケツに蹴りを入れてくる。

「早くしやがれ！」

そこらのチンピラよりも凄みのある形相だった。俺は仕方なく、イベント会場のスタッフばりに声を出した。

読み逃した雑誌はございませんか。先週号、先々週号のジャンプやマガジン置いてます。一部三千円でございます。

しばらく続けたが、来るのは余所余所しさを含んだ視線ばかりだった。人は異質を本能的に避ける生き物である。そして俺たちは今、完全に異質だった。

何やってんだろ、俺。やがておっさんが苛立ったように後ろで舌打ちをしてくる。

「おい、三千円は高すぎる。三百円に下げよう」

「え、でも俺は三千円で売られましたよ」

「屁理屈言っんじゃないやねえ。さっさとしろ」

それから二時間ほど続けたが、結局一冊も売れなかった。おっさんはまた雑誌を風呂敷に包み、次の場所へ向かうべく立ち上がった。バイトはまだまだ続くようだった。その後俺は露店に出すための雑誌をコンビニのゴミ捨て場で拾い、それから道に落ちているアルミ缶を集めさせられ、そのアルミ缶を売ってこいと言われたので業者に売って小銭を稼いだ。コンビニ袋三つをいっぱいにしたのに、百五十円しか貰えなかった。

「金を稼ぐのは大変だろう」

おっさんは、職場体験を終えた中学生に向けたような言葉をかけてきた。俺は額にかいた汗を拭い、無言で頷く。

おっさんはそんな俺の背中を叩き、ガハハ、と笑った。

「おっといけねえ。今日は豚汁を食べるんだった」

おっさんはまた歩きだした。行き先を問うと、日比谷公園だ、と彼は答えた。歩いていくつもりらしい。直線距離では三キロくらいだろうが、なにしろ東京の道は入り組んでいるので体感ではもっと距離を感じるのだらう。日は傾き始めていたが、存分に全身の水分をカラカラと奪ってくれた。背広を腕に持ち直し、汗まみれの脇にジャンプを挟み、俺はネクタイを緩める。おっさんの後ろ姿が霞んで映るようだった。ああ、ほんと何やってんのよ俺。

日比谷公園へ着く頃にはもう夕方になっていた。俺は疲弊し、肩で息をしていたが、おっさんは表情一つ変えていなかった。ホームレスというのはつくづく生命力の強い人種だと思う。

公園では、行政の支援団体らしき集団が長机を並べ、ホームレスたちに豚汁を配っていた。おっさんは豚汁をすすりながら知り合いのホームレス数人に声をかけていた。俺は豚汁を抱え、彼らと少し離れた木の根本に腰掛けた。

おっさんたちが談笑し、ときに情報交換をする姿が、会社の同僚たちの姿と重なる。まとまりのない無法者だと思っていた彼らにも、こうして彼らなりの社会が形成されているのだと気付く。彼らだって、生きるために必死なんだ。社会から逃げ出した俺と比べると、彼らの方がより社会人然としている気がした。

俺は下を向き、猫背になりながら豚汁をすすった。俺の口にはいつの間にか砂がこびりついていて汁がざらざらとしたけれど、あまりの美味しさに涙が出てしまいそうだった。実際、少し出てきた。ぽろりと落ちたそれを皮切りに涙腺が決壊して、たちまち嗚咽で豚汁が喉から逆流し、俺は盛大にせき込んだ。その拍子に豚汁を地面にぶちまけ、それがまた悲しくて悲しくて、俺は地面に転がりながら「豚汁食いてえよお」と幼児のように大泣きした。

情けなくて、惨めで、きっと俺は社会で生きていく才能はないのだろうと、悔しくて仕方がなかった。

ふと、俺の頭の上に手が置かれる。野獣のような臭いがした。涙で滲む視界を押し上げると、微笑むおっさんが俺を見下ろしていた。「俺のやるからよ、泣くんじゃねえ」

おっさんの優しさにまた泣いた。ジャイアンの法則である。性悪な奴がたまに見せる優しさは胸を打つものだ。おっさん、それは卑怯だよ、と俺は泣き喚いた。おっさんは無言で公園を出ていった。十分ほどで戻ってきたおっさんの手には缶ビールが二本握られていて、一本を俺に差し出した。

おっさんと一緒にビールを煽り、豚汁を水のように喉に流し込む。その味は舌の上でとどまらず、全身を濃厚に駆け巡るようで、ここまで旨い酒の呑み方を俺は知らなかった。ビールと豚汁をたいらげて息を吐くと、俺はすっかり酔ってしまっていた。

「もう帰っていいぞ。お前は十分働いてくれた」

おっさんが赤い顔で微笑む。嫌だ、もう一日ホームレスやりたい、俺が言うとおっさんは静かに首を振った。

「家があるもんはホームレスやっちゃいけねえんだ。帰れ」

おっさんが地面に落ちていた先週号のジャンプを差し出す。

「帰らねえと、これはやれねえな」

俺は逡巡したが、黙ってそれを受け取った。ホームレスは楽しかったけど、やはり先週号は読んでおきたかった。俺とおっさんの絆などそんなものだ。俺は、自分と社会との繋がり、薄さを再確認しつつ、帰路へ着いたのだった。

ああ、無情。

家に帰ると、母が布団に横になっていて、盛大にいびきをかいていた。家の電話には留守電が十七件入っていた。全部会社からだった。その電話番号に掛け直すと、次長の大激怒が耳をつく。

辞めます、それだけ言っただけで、俺は受話器を置いた。

母のいびきを聞きながらジャンプを読んでいると、母がのっそりと起き上がり、目をこすった。

「ああ、おかえり」

「ただいま」

「それ、先週号のジャンプ？」

「うん」

「マジで。読みたかったんだよね。読ましてよ」

「うん」

母が差し出す手を、俺はじっと見つめた。所々ひび割れた苦労人の手をしていた。おれはあのホームレスのおっさんを思い出した。はやくはやく、とその手が揺れる。俺は母の目を見据えた。

「ねえ」

「何よ、早く読ませて」

「今日、会社辞めてきた」

「あつそ」

早くよこしなさいよ、と言わんばかりに俺の手からジャンプを取り上げる母。やっぱいい加減だな、この人。

手ぶらの俺は仕方なく母がジャンプを読む姿を眺めた。母は巻末のギャグ漫画を読み、大口を開けてげひやひやと下品に笑う。

そんな母を見ると、俺の怒りや悲しみなど、その他もろもろの悩みの全てが宇宙のちりのようにどうでもいいことのように思えてくる。俺は母と同じように、げひやひやと笑った。

「明日っからちゃんと就活しなさいよー」

「おー」

どうでもいいです、どうでもいいです。

オリジナルのリズムを口ずさみながら、俺は窓越しの夜空を見上げた。

（後書き）

ドラマもなければ伏線もない、たまにはこういうのもいいかなって
思いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3484p/>

どうでもいいです。

2011年7月22日03時42分発行